

# 書 評

## Book Review

竹下節子著

『ユダ — 烙印された負の符号の心性史』

中央公論新社, 2014年, 213頁.

### 1. 起 — 問題提起

古来、ユダに関する解説書は枚挙にいとまがない。あらゆる時代のあらゆる地域の人々が等しく興味をいだくことのひとつとして「ユダの行く末」が挙げられるだろう。果たして、ユダは救われたのか、救われなかったのか。たいていの場合、答えは二分される。まず、第一として、ユダは絶望の叫びをあげて滅んだ、という説。そして、第二として、ユダは神の特別な計らいによって慈悲深き懐に迎えられた、という説。しかし、真の答えは、神のみぞ知る、である。少なくとも、人間には判定をくだすことは困難であるし、安易な二者択一による付け焼刃の解決姿勢にこだわることは傲岸不遜なる仕儀に他ならないことは誰にでも予測がつく。

それでは、実際に、ユダをどのように理解してゆけばよいのだろうか。つまり、とかく二つの方向に引き裂かれる解釈にさらされつづけてきた私たちにとって、ユダはどのように意味づけられる存在なのだろうか。

### 2. 承 — 自分を見つめ直す

西洋キリスト教文化史研究者の竹下節子はユダに関する古今東西の解説書を万遍なく読み込みながらも、それぞれの時代の風潮や地域性を鑑み、「裏切り」をはたらく人間の生き方の意味そのものに迫ろうとする。ということはユダを単なるスケープゴートとして血祭りに挙げることなく、むしろ誰もが隠し持っている狂気への傾きを冷徹に見つめなおす方向に一步踏み出してみようという思索上の壮挙を竹下が試みたとと言える。ユダは私たちに対して生き方の奥深さを問いつづける試金石として今日も立ちはだかる。つまり、他ならぬユダの存在意義を問う私たち自身が自分の行く末をどのように方向づけるのかを見究めなければならないように迫られている。

### 3. 転——本書の構成と内容

さて、本書は全八章構成でユダの存在意義を問う（「序章」と「終章」の間には六章の区切りによる解説が配置されて展開される）。

「第一章 ユダの神学とキリスト教の成立」では、「普遍救済論」と「予型論的歴史観」というキリスト教の神学上の解釈の仕方の絶妙な方法論にも触れながらユダの人物像に対する解釈の広がりをも説明している。ユダ個人の生き方の問題を感情的に捉えるのではなく、むしろ罪びとの救済の視座から見直すという意味で「普遍的救済論」が重要となる。そして、裏切りの責任をユダ個人だけに背負わせるのではなく、歴史上繰り返される普遍的な欠点として捉え直すことで人類史そのものの改善を熟考すべく志すという意味で「予型論的歴史観」の視座が欠かせない。

「第二章 ユダの両義性」では、ユダを大目に見る寛容な姿勢と必要悪として受容する姿勢を紹介している（ユダを断罪しない場合のスタンスの取り方としての代表的二方向性を余すところなく論じている）。寛容な姿勢は、ユダと自分とを連続させて物事を問い直す態度であるとも言えよう。そして、必要悪という視座は、悪の方向性を用いてすら神が最善の意志を発動し得ることへの信頼を想起させるきっかけともなり得る。もちろん、悪を避け、最善の道を早期に選択するだけの強力な意志力を私たちが常日頃鍛え上げておかねばならないことは言うまでもないことではあるが、

「第三章 ヨーロッパにおけるユダ像のヴァリエーション」では、フランス・ドイツ・スペイン・イギリスにおけるユダ理解を通覧している（竹下が最も得意とするフランス文化史を皮切りとして近隣諸国の事情に触れながらヨーロッパ主要地域のユダ理解がまとめられている）。ユダ像とは、人間の住む地域の文化背景とも結びつきながら多様な姿を現す問題意識の集積なのであり、ユダ個人の生き方を遥かに凌ぐ思索と表現を生み出す契機となっている。

「第四章 プロテスタントとユダ」では、バルト神学および宗教音楽という二つの視座からプロテスタント的なユダ理解の意味を確認している（プロテスタント神学の嚆矢としてのバルトを扱えば物事の真相が明確になるという卓見、そして宗教音楽の発展にこだわったプロテスタントの実践的礼拝の歴史的貢献を評価する友好的態度。これらの方向性に竹下の寛容なエキュメニカルな意図が垣間見られる）。

「第五章 ロシアのユダ」では、ユダの騎士団やロシア文学という切り口でユダの受容に関して説明してゆく（これまで陽の当たらなかった領域を丁寧に論じている）。ヨーロッパ全域の文化事象におけるユダ像を論じるにとどまらず、ロシアにまで研究の枠を広げることで、より一層普遍的な問題提起の象徴としてユダを再評価する意図

が垣間見られる。比較文化史家としての竹下の面目躍如、研究への熱意が反映されている。

「第六章 反ユダヤ主義とユダ」では、「ホロコースト」という視点を軸にして近現代の歴史的現実における象徴的なユダの取り扱い方が明るみに出される（近現代の外交・政治史を扱うようであり、その実、古代から現代に至る「ホロコースト」的仕儀そのものを考察しようという野心が隠されている）。とくにアウシュビッツでの虐殺以降の時代を生きている私たちにとって、ホロコーストの惨状の原因と経過を知ることが、同様の悲劇を二度と惹き起こさないための反省の機会を自覚的に作り出すことにつながる。

こうして全六章の本文の流れを眺めてみると、基本的にはヨーロッパの文化史全般を視野に含めて、その枠内でユダがどのように理解されてきたのかを竹下が跡づけていることがわかる。それゆえ、本書は「ユダ理解の文化史」として読むことができる。しかし、同時に、竹下は太宰治や遠藤周作などの日本の近代小説におけるユダのキャラクターの換骨奪胎の仕方にも言及しており、その意味で本書は比較文化的な要素も決して疎かにせずに評論の射程に収めている点は文化史的な問題意識の完備という意味で見事である。

ただし、全体的な記述の仕方は幅広く浅くという程度で過不足のない評論に終始しているにとどまり、竹下の豊かで底知れない学殖が十分に活かされていないという点で物足りない（註釈や参考文献の詳しい説き興こしが増し加われれば立派な学術書にまで成熟することができたであろう）。もちろん、本書が学術書たらんと欲して作成されたわけではないので、評者の物言いは苛烈な批評と言えなくもないかもしれないが、学術的にも実力のある竹下に対して評者は一層の期待をかけていたことを決して隠し立てしたくないので敢えて苦言を呈することとした。

#### 4. 結 —— 哲学的な価値

結局のところ、ユダの生き方とおして読者もまた自分の生き方の意味を問うことができるという仕儀において、本書は哲学的な価値を有している。哲学とは、先人の智慧から学ぶと同時に自分自身の現在を真摯に見つめる作業であるのだから。ユダとその解釈者たちという先人たちが紡ぎ出す智慧を歴史的にたどりつつも、現在の読者の心の内面の在り方をも真っ直ぐに見つめる日々が、本書を読むことで成し遂げられる効能なのである。

なお、参考までに、竹下の本書が執筆される端緒となった「特集 イスカリオテの

ユダ」に関する諸論考を掲載した雑誌を以下に記しておく。——『カトリック生活』4月号, ドン・ボスコ社, 2012年(竹下の論考は「ユダが『裏切り者』になったわけ」と題されており, 16-18頁に掲載されている)。この論考を読めば, 竹下のユダ理解の基本線が見えてくると同時に, その後の研究の動機も明らかとなる。

(阿部伸麻呂)